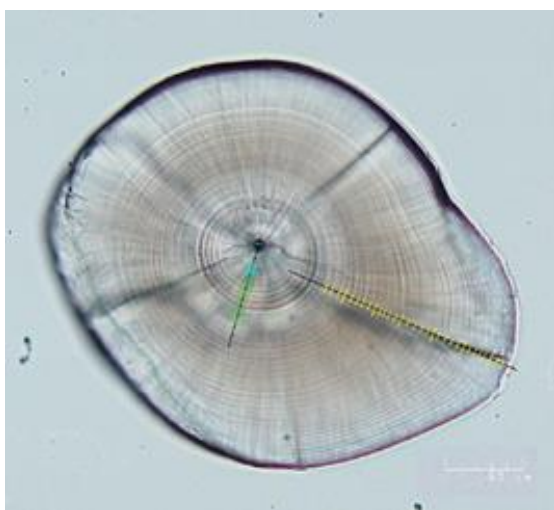


2013 年前半の研究内容（ヒラメ班）

仙台湾（6、7、9月）および丹後海湾奥部（5、6、7月）において、ヒラメ当歳魚および餌量生物の採集ならびに環境調査を行った。仙台湾浅場（水深<15m）では例年通り主要な餌となるアミが豊富に現存していた。2012年級群は、2012年冬から徐々に深場（水深>30m）へ移動しており、2013年7月以降、浅場の成育場では採集されなくなった。今後、深場への移動を開始する要因、浅場と深場の生態比較を実施する予定である。丹後海では平年の10倍近い密度でヒラメ稚魚が着底した。餌料となるアミ類の密度は、例年6月後半から7月にかけて急速に減少し、この季節変化はアミ類の生活史に起因する自然現象と考えられている。しかし、今年のアミ類は調査を開始した5月には例年よりもかなり低い密度であり、この原因として高密度に加入したヒラメ稚魚による捕食の影響が考えられた。また、13~19℃で飼育した稚魚の耳石の酸素安定同位体比を測定した。両者の関係には明瞭な負の相関が認められ、酸素安定同位体比が経験した水温履歴の指標として利用できる可能性が示された。



ソリネットにより採集された魚類
ヒラメ、イシガレイ、クロウシノシ
タ、マゴチなど。



ヒラメ稚魚耳石の日輪
2本のラインは成長速度の履歴を
推定するための日輪幅の計測線
を示す